

すべきとの結論に達した。

25. ^{99m}Tc -コロイドスキャンと ^{99m}Tc -HIDA スキャンで肝イメージ上、所見の相違を呈した肝内胆管癌の一例

鹿熊 一人 (能登総合病院・放)
伊東 哲郎 (同・内)
宮崎 吉春 井上 寿 塩崎 潤 (同・RI)
油野 民雄 (金大・核)
松井 修 (同・中放)

症例は63歳女性。既往歴として高血圧性心疾患、慢性肝炎を指摘されており、全身倦怠感を主訴として来院。検査成績では、肝胆道系酵素の軽度上昇と、血沈の軽度亢進を認める以外に特記すべきことは認めず。外来超音波検査にて、右肝内胆管枝の軽度拡張像と、肝門部の小腫瘍陰影を認め、肝内胆管癌を疑い精査した。 ^{99m}Tc -HIDA スキャンでは、肝への集積ならびに、右肝内胆管枝の描画を認めず、右肝内胆管閉塞の所見を呈した。 ^{99m}Tc -スズコロイドスキャンでは、び慢性肝疾患の像を呈したが、特に Defect の所見は認めなかった。

本邦における区域性胆管閉塞の例は、主に肝内結石が多く、肝内悪性腫瘍による報告はきわめて稀であること、また、 ^{99m}Tc -スズコロイドスキャンと、 ^{99m}Tc -HIDA スキャンで所見の相違を呈した、悪性腫瘍による区域性胆管閉塞の例が、まだ Gamnt にも記載されていないことより報告した。

26. ^{201}Tl 経直腸的門脈循環検査のシミュレーション：コンパートメント解析の試み

中嶋 憲一 利波 紀久 久田 欣一 (金大・核)

^{201}Tl の直腸内注入法により算出される心/肝摂取率比 (H/L) は、門脈・大循環系のシャントを反映する指標として臨床に応用されている。しかし、 ^{201}Tl の体内での動態には不明な点もあり、H/L とシャント率との関係も明解にされていない。そこで、本検査における ^{201}Tl の動態を3コンパートメントまたは4コンパートメントと仮定して、シミュレーションを行った。3コンパートメントは、直腸、肝、心の3臓器に設定し、おのおのの

K 値 (あるいは半減期) を変化させたときの H/L に与える影響を検討した。さらに、その他の臓器を代表する第4のコンパートメントを設定した場合についても検討した。この結果、1) H/L は ^{201}Tl を直腸内に注入後、3時間以内では、わずかに増加するものの、ほぼ一定とみなせること、2) 直腸からの吸収の速さは、H/L にほとんど影響しないこと、3) シャント率が増加すると H/L は指数関数的に増加することが推定された。しかし、コンパートメントの数、各臓器の K 値 (または半減期) の設定、シャント経路など、問題点も多く、今後実験結果などとも併せて、さらに検討予定である。

27. 脾疾患における脾シンチグラフィの評価

吉田 宏 松尾 定雄 矢橋 俊丈
岩田富貴子 金森 勇雄 (大垣市民病院・放)
中野 哲 綿引 元 武田 功
小沢 洋 杉山 恵一 渡辺 幸夫 (同・消)
佐々木常雄 石口 恒男 (名大・放)

今回、われわれは、151例の脾シンチグラムを疾患別に検討し、脾シンチグラフィの評価を行った。

(1) 脾シンチ上、明瞭な描出を示したものは、良性疾患に41例中27例 (65.9%) と多く、脾疾患、特に脾癌では18例中1例 (5.6%) と少なかった。

(2) 脾シンチ上、全体的に淡い描出を示したものは、良性疾患 (14.6%) に比し、脾炎 (28.0%)、慢性脾炎疑診群 (20.0%)、糖尿病 (27.8%) に若干多い傾向を示した。脾癌では18例中1例 (5.6%) と少なかった。

(3) 脾シンチ上、全体欠損を示したものは少数ではあるが脾癌 (16.7%)、脾炎 (16.0%)、悪性疾患 (10.3%) にみられた。

(4) 脾シンチ上、部分的な描出不良を示したものは各疾患とも良性疾患 (14.6%) と同程度の頻度であった。

(5) 脾シンチ上、部分欠損を示したものは、脾疾患、特に脾癌 (61.1%) に多かった。

(6) 脾シンチ上、全体的あるいは部分的に欠損像を呈した症例は、ERCP, CT, US により、同部位に形態異常を認めるものが多かった。

(7) 脾癌のシンチグラム像は、頭部癌では全体欠損を、体部癌では、尾部欠損を、尾部癌では尾部欠損を示す傾向にあった。

以上、シンチグラムのみから確定診断を下すことは困難なことが多かったが、存在診断には有効な検査法の1つであると思われた。

28. 手根骨等に RI 異常集積を示した骨シンチ像について

三島 厚 大野 晶子 (名大・分院・放)
渡辺 令 佐々木常雄 (名大・医短・放)

臨床的に kienböck と診断された6例と手指、手掌等

に、軽度の事故のあった3例について、テクネー MDP 20 mCi による骨シンチグラムを行った。

結果

1) 7例が kienböck と考えられた。月状骨を中心とする強い集積が認められた。

2) 2例は手指骨間の関節と第一指の C-M 関節に異常があった。

3) kienböck については、月状骨の他、病期の進展度に応じて、他の手根骨にも集積がみられた。